

番号	28 - 7	申請者	リウマチ内科部長 森 俊輔
<p>【審査申請課題】 抗IL-6受容体抗体(トシリズマブ)治療判定における血清メタロプロテアーゼ3(MMP3)の有用性についての検討</p>			
<p>【審査課題の概要】 抗IL-6受容体抗体トシリズマブ(TCZ)は、抗リウマチ薬のひとつである。MTX抵抗性RAに対し優れた疾患活動性改善効果を持つ。多くの場合、抗リウマチ治療薬による疾患改善効果は炎症マーカーであるCRPや血沈によりおおよその予測は可能であるが、TCZ治療は有効無効にかかわらず炎症マーカーは陰性化する。TCZ治療導入の際には、導入時の疾患活動性が高いため、腫脹・圧痛関節数の減少、患者・医師による全般評価により効果を判定できる。しかしながら治療導入後、疾患活動性の再燃(二次無効)初期には関節エコーによる評価によっても滑膜炎存在を検出することは困難である。特に指などの小関節では困難である。一方、MMP3は疾患活動性を炎症マーカーより感度高く検出する検査として知られており疾患特異性の高い抗CCP抗体登場前にはRA早期診断の手段として頻繁に利用されていた。しかしながら抗CCP抗体登場により、健康保険承認された検査法であるが、現在では、診断の際、1回しか認定されていない。予備的試験でTCZ二次無効においてCRP陰性例でMMP3が高値である症例を経験した。今回、TCZ治療による効果判定にMMP3の有用性を示すことを目的として研究する。</p>			
審査結果	承認 (平成28年7月1日)		

番号	28 - 5	申請者	看護師 東 沙嬉
<p>【審査申請課題】</p> <p>症状不安定な重症児をもつ在宅移行不安の強い家族への支援</p>			
<p>【審査課題の概要】</p> <p>小児の場合在宅療養を選択するか否かは、両親が意思決定する場合が多い。しかし、一度在宅療養を選択したとしても、在宅移行過程において思いが揺らぐ家族もいる。今回、在宅移行のための教育入院中に、母親は長引く入院生活や病状の不安定さから、焦りや苛立ち、不安が強くなった。体験宿泊時には両親が言い争う姿が見られ、「自宅に連れて帰る自信が無くなった。私ひとりじゃ無理」という言葉が聞かれた。在宅移行を断念せざるを得ない程追い込まれた両親の姿があった。家族は、家族自身の力で様々な状況を乗り越えていくことができる集団である。家族がそれぞれの持つ能力に気づき、それぞれの持つ力を発揮することができるように支援することで、家族が一丸となって在宅移行に向けた行動をとるようになった。退院までに5ヶ月を要したが無事在宅療養に至った。</p>			
審査結果	承認 (平成28年6月29日)		

番号	28 - 6	申請者	看護師長 木村 由美
<p>【審査申請課題】</p> <p>熊本地震における緊急避難入院の現状～熊本再春荘病院編～</p>			
<p>【審査課題の概要】</p> <p>平成28年4月の熊本地震の際に、小児科病棟では重症児の緊急避難入院を14家族受け入れた(病院全体として28名受け入れた)。入院の受け入れに当たっては、夜間でマンパワーの不足する中、混乱なくスムーズに対応することが出来た。毎年台風災害の歳に緊急避難入院を受け入れていたことが、今回の緊急事態に活かされた結果である。</p>			
審査結果	承認 (平成28年6月29日)		